

## 循環型社会における知と学び

吉村文男  
Fumio, YOSHIMURA

### 1. 問題の所在

「循環型社会」という語は現在の日本でしばしば語られる。例えば、環境省編集の『平成13年度版・環境白書』は「地球と共生する『環の国』日本を目指して」と題され、その「環の国」（「わのくに」と読ませている）について「持続可能な簡素で質を重視する循環型社会」をイメージするものと説明されている。（同書、2）この平成13年度環境白書は「平成12年度環境状況及び政府が環境保全に関して講じた施策に関する年次報告」であるが、この平成12年度には「社会における物質循環の形成を通じた、製品などの使用・廃棄に伴う天然資源の消費抑制と環境負荷の低減を目的」とした「循環型社会形成推進基本法」が成立し、この法律において「循環型社会の形成に向けた基本原則と、施策の基本事項など対策の枠組みが示されて」いる。（同書、60）

このように「循環型社会」という言葉が付けられた法律ができるほどに、循環型社会という言葉は今日の日本で一般化してきているといえるが、それは環境白書も言うように次のような日本社会の現状があるからであろう。平成11年度にあっては「わが国の社会経済活動には17.5億トンに及ぶ自然界から資源採取（水及び大気を除く）を含め、20.4億トンの資源が国内外から投入されています（総物質投入量）。そして投入された資源のうち、5割程度がそのまま消費、廃棄に向かっていきます。また、投入された資源の約1.8倍の『隠れたフロー』が生じています。一方、廃棄物のうち資源として再利用しているのは2.2億トンで、総物質投入量の約1割程度にすぎません」（同書、57）といった日本の社会の現状である。つまり、「わが国の物質収支をみると、資源採取から消費、廃棄へ向かう一方通行が主流となって」（同書、57-8）いる現状から、向かうべき社会のあり方として「循環型社会」と言われているのである。

「循環型社会」が唱えられるのは、現実の社会が『循環型社会』と呼ぶにはほど遠い状況」（同書、58）だからであるが、それだから過去の「循環型社会」が注目を集めるといえることがある。それは江戸時代の日本社会である。「第二次世界大戦後、江戸時代に関する歴史的評価は大きく変化した。第一期は戦後民衆主義の潮流の中で江戸時代の庶民資料が認められて、庶民資料に基づく近世史研究が盛んになった時代である。（中略）誤解を恐れずにいうならば、この時点では江戸時代の封建諸制度は、近代化にとって克服されるべき対象としてみなされるのが一般的であった。」（鬼頭宏『文明としての江戸システム』講談社2002年、314）こうした江戸時代に対する見方と違って、「現在、江戸時代に対する積極的な評価が、これまでになかった側面からなされるようになった。」（同書、315）それは次のようなことである。すなわち「『持続可能な開発』は、二十一世紀の地球世界が目指すべき目標である。それを江戸時代後半の社会が実現して見せたのではないか、と江戸時代の生活文化に現代からの熱い視線が注がれているとあってよい。人口成長の意図的な抑制、資源の再利用と再生、そして節約が完璧なまでに実践された循環型社会、といった評価である。」（同書、317）鬼頭は一方で「江戸時代を美化することもまた、行き過ぎになっていないか」（同書、317）としながら、「成長と競争に明け暮れた二十世紀に、江戸後期に達成された生活文化は、いったんは否定され、破壊された。それが今、新しい道具立てを背景に、ふたたび求められているといたら、言い過ぎだろうか。」（同書、323）と述べている。

こうした「循環型社会」であった江戸時代の日本社会へ熱い視線を注ぎながら「循環型社会」が現在の日本において語られるのは、現在の日本社会が「循環型社会」でなく、そうしたあり方において深く

行き詰まっているという認識が多くの人々によって共有されてきているからであろう。小論は、循環型でない現在の社会が行き詰まっているのをそこにおける「知」のあり方とその「知」の「学び」という次元において捉え、「循環型社会」ということで目指されている、現在の社会あり方の行き詰まりから脱し現在の社会から転換した社会を「知」と「学び」というところから考えようとするものである。

しかしなぜ「知」と「学び」なのかという疑問が呈せられるかもしれない。それはこういう理由による。すなわち、人間の知は各時代の各社会の在りようによって規定されると同時に逆に各々の社会を創り上げるし、そうした知は決して人間に生得的なものでなくて学ばなければならないが、そこからすると「知」と「学び」は社会の在りように対して基本的な意味を持っているからである。そしてここでは「学び」という言葉を使うが、それとほぼ同じ意味で用いられる「学習」という用語を用いないのは（むしろ「学習」の方が学術的な用語であろうにもかかわらず）なぜかということにも一言しておこう。学習は英語の「Learning」に対する言葉であろうが、Learningについては「Psychology of Learning（学習心理学）」という心理学における一分野が存在することからも分かるように、学習は主として心理学の対象としてさまざまに研究されてきた。「学習」は、まさにそれがそうした学術的用語であるゆえに、どのようにそれをを用いようともそのような限定された意味を少なくとも背後に持つことになるであろう。そのことを考慮すると、ここでは心理学的な「学習」を排除するのではなく、それを含んでより包括的に「学習」を捉えてゆきたいと考えるので、日常語に近い「学び」を用いることにする。

まず、今熱い視線を向けられている「循環型社会」としての江戸時代日本社会を大づかみに考察し、それとの対比において「循環型社会」へ向かわねばならないと言われるまでに行き詰まった現在の社会を考えてみよう。

## 2. 江戸時代日本の「循環型社会」－「循環系の社会」としての前近代社会

「循環型社会」として現在熱い視線を向けられている江戸時代の日本社会では、なによりも資源リサイクルが徹底していたことが注目されている。人間の尿尿がそのまま捨てられず、農作物に対する肥料として農家によって買われて使われたこと、古着の再利用が一般的でそれを取り扱う「古手屋」が存在したこと、再生紙を作るために古紙を拾う「紙くづ拾い」が商売として成り立っていたこと、蠟燭の溶け流れたものを買集めて再生する「ろうそくの流れ買い」という商売もあったこと、など資源のリサイクルが徹底していたと言われている。（鬼頭宏、前掲書19）

ただし、「循環系の社会」を唱える哲学者の内山節は資源リサイクルにのみ注目して提唱される「循環型社会」を次のように批判する。「いま世のなかで語られている循環社会は、資源のリサイクルなどに限定されていて、うまく資源を循環させながら経済成長をはかりましょうという変なものです。」（内山節「循環系の社会」『自然と人間を結ぶ』農文協1998年148号、26）

このように今の世の中で唱えられる「循環型社会」を批判する内山は、彼の言う「循環系の社会」について次のように述べる。内山によれば、世界中のどこでも、中世まで、日本史で言えば近世まで社会は「生産力が大きく増加することのない社会としてつくられていました。」（同書、24）もちろん100年、200年の単位で見ると生産力は拡大するが、日本の江戸時代の農村においては200年から300年で生産力が倍増するという程度で「近代以前の人々は、生産力は毎年同じである、社会の富の量は増加していかないということを前提にして、いろいろなことを考えながら暮らしていました。」（同書、25）そのような「昨年と同じ暮らしを基本とした社会」（同書、26）を内山は「循環系の社会」と呼ぶ。「生産力は拡大しないのですから、いまの生産水準で誰もが循環的な暮らしをしていくほかないのです。祖父母たちが暮らしたように父母が暮らし、私たちが同じように暮らし、子どもたちもまたそうであるような、循環がここにはあるのです。」（同書、26）

内山はこうした彼の言う「循環系の社会」においては、毎年同じことが例えば季節に従いながら繰り返し再現されることを述べている。「春になれば種を播き、秋になれば収穫する農夫の暮らしも、冬には階下で羊を飼い、春になると動物たちを山の草原に放す畜産農家の暮らしも、基本的に変わることなく継承されつづけるのです。（中略）こうして、何十年も、何百年も前に村人たちのおこなっていた労働と生活が、新しい装いを伴いながらも、毎年循環的に再現されていくのです。」（内山節『子どもたち

の時間』岩波書店1996年、49)

こうした生活においては、季節の巡りという循環が人々の世界観をまた循環的に作りあげていたであろう。大林太良によると、「伝統的な社会に生きる人々の基本的なものの考え方の一つに、自然も人間も、衰弱と回復、あるいは死と再生を繰り返す、という観念がある。世界的に広がっている洪水神話をみても、いったん世界と人類は大洪水で滅び、わずかに生き残った者から新しい人類と新しい世界の秩序がはじまることになっていて、この観念をよく表わしている。(中略)これほど規模の大きな話ではなくとも、夏と冬、乾期と雨期、さらに昼と夜というような自然界の衰弱と回復、死と再生のリズムは、人びとが毎年直接体験しているところである。これから、自然と人間もこのようなリズムを繰り返すのだという世界観が生まれるのは不思議ではない。」(大林太良『正月の来た道』小学館1992年、10)ただそのようであっても、「このリズムが正常に運行され、維持されるためには、人間がその折目節目に儀礼的にアクセントをつけ、折目に達し、折目を通過したことを明らかにし、実感することが必要である。人の誕生から、成年式、結婚式、そして最後の葬儀、など人生の通過儀礼、また一年を通じての数々の年中行儀は、そのような性格の儀礼なのだ。」(大林太良、同書10)つまり、いわば循環的世界観、時間は一直線的に前へ流れるのではなく循環するのだという世界観は、ただの観念としてあるのではなく、人々の日常生活の中に例えば年中行事といった具体的な形を取って現われていたと言えるであろう。江戸時代の「農村の労働は近代の工場労働とは異なり、年間を通じて日々、単調にくり返されるものではなかった。季節の移ろいにともない、農山漁村の作業と労働は周期的に変化した。その合間に、収穫の祈願を中心とする儀礼が年中行事としておこなわれ、伝統的な生活リズムが形成される。」(鬼頭宏、前掲書283)

近代前の循環する社会とは、内山が批判するように資源のリサイクルなどによってうまく資源を循環させて経済発展を遂げようというような社会ではなく、上に見てきたようにその世界観に至るまで循環が中心に置かれている社会であろう。

### 3. 「拡大系の社会」としての近代社会

以上のような「循環系の社会」としての江戸時代が終わって明治時代に入ると、日本社会は内山の言い方であれば「拡大系の社会」としての近代社会へと急速に変貌してゆく。このような変貌の中で敢えて「民間」に身を置く道を選んでそこからこの「近代化」をリードした福沢諭吉はその著『文明論の概略』の中で、ヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国を「最上の文明国」、トルコ、中国、日本等の諸国を「半開の国」、そしてアフリカ、オーストラリア等を「野蛮の国」とする「世界の通論」を挙げ、「彼の文明、半開、野蛮の名称は、世界の通論にして、世界人民の許す所なり。」(『福沢諭吉選集 第4巻』岩波書店1991年、20～21)と述べている。このように「半開の国」である日本について、福沢は別の論考において次のように言う。この論考は「教育の目的」と題され、それは「人生を發達して極度に導くに在り」とされる。(『福沢諭吉選集 第3巻』282)そしてこのように導くのは何の為かと問い、「人類をして至大の幸福を得さしめんが為なり」として、この幸福は「天下泰平家内安全」、このうちの二字を取って「平安」であるとする。しかし福沢の言う平安は「近くは我徳川政府二百五十余年の泰平の如き」ものでなく、この泰平は「万民安堵、腹を鼓して足るを知ることなれども、其足るを知るとは、他なし、足らざるを知らざりしのみ。」(同書、283)といった種類の平安なのである。従って「野蛮の無為、徳川の泰平の如きは、平安と称する可らざるのみならず、却って之を苦痛不快と認めざるを得ず。」(同書、284)ここで簡単に福沢諭吉を「近代主義者」として断罪するといった短絡的判断は厳に慎まねばならないが、しかし「一身にして二世」を生きた福沢にとって江戸時代が「野蛮の無為」の時代と写ったことも事実であろう。そしてここでは、福沢個人の見解を云々することが重要なだけでなく、それが明治の日本社会の大きな方向を示していることに注目したい。内山は「現代社会は、程度の差はあっても、『停滞』を敵視する社会としてつくられています。」(『子どもの時間』、51)と言うが、江戸時代を「野蛮の無為」の時代とする明治の日本社会は、まさに「停滞」を敵視する現代社会の始まりであると言える。『循環系の社会』を「停滞」した社会として「敵視する」近代から現代の社会は内山によれば「拡大系の社会」である。

「拡大系の社会」は、内山によれば、ヨーロッパの中世後期に、「大航海」時代が開始され、そこで貿易商人が世界中に広がって交易を展開し、「交易によって市場は無限に拡大し、その交易をとおして富は無限に増加してゆくという感覚を人々が覚えた」（『循環系の社会』25）というところに始まる。

そしてさらに、十八世紀末から十九世紀にかけてイギリスから始まってヨーロッパ大陸へと広がった「産業革命」が新しい生産方法を造り出すことによって、人々は「生産力も富みも無限に増大することを覚えるのです。実際産業革命は、毎年生産力が倍増することさえ可能な時代を開きました。」（同書、25）こうして、無限に拡大できる生産力のもとで富も権力も無限に開かれたものとしてあるという感覚を人々がもったとき、「毎年変わらない社会から拡大しつづける社会へと自分自身を移すことによって、富も権力も何もかもが可能だと感じる新しい個人たちが生まれてくる」（同上）。こうした近代社会を内山は「拡大系の社会」と呼ぶが、この社会に最も適合した経済システムは「拡大再生産をとげつづけることを正常な状態とした経済システムである」（『子どもの時間』、51）資本制商品経済である。20世紀は「社会主義社会」を生み、それは少なくともこうした資本制商品経済がそれ自身を無条件に展開するのに歯止めをかけるという役割を果たしえたが、社会主義社会が同じ20世紀末に次々と消滅したとき、資本制商品経済が世界市場を形成しつつそれ自身のあり方をなんらの妨げもなく現わしているのが現状であろう。

しかし「拡大系の社会」の今日における展開は、環境破壊といわれる自然破壊を生み出し、資源や食料が「先進国」においてあたかもそれらが「無限」であるかのごとくに浪費され、「富と権力の拡大をめざした結果、人々は競争と争いのなかにまきこまれ、それらのことが私たち自身としての人間の荒廃さえ感じざるをえないようになってきました。」（『循環系の社会』、26）先に現代の循環しない社会が行き詰まっていると言ったのは具体的にはこうしたことに現われているのである。従って、問題は資源のリサイクルといった循環で済むものでないだろう（もちろん資源リサイクルが不必要だとか、どうでもいいことだというのでないことは当然である）。ここでは、そうした「拡大系の社会」と内山が呼ぶ近代から現代の社会と前近代の「循環系の社会」のそれぞれをその社会の根底にある「知」と「学び」という観点から両者を比較しつつ、その点における前者の社会の問題点とそれを超えてゆく手がかりを考えてみたい。

#### 4. 近代社会における知と学び—前近代社会における知と学び

「今日まで支配しているデカルトの科学理論は、『われ思う、ゆえにわれあり cogito ergo sum』という命題にもとづくものであって、思考する自我に、後には行為する自我にも、四圍の事物という客体、自然という客体にたいする無制限の全権・全能を与えたのである。」（F・G・ヴィンター〈今村孝・訳〉『ゲシュタルト社会へ』人文書院1982年、116—7）

近代社会における「知」を問題にしようとするれば、われわれがまずここで挙げられているデカルトに注目するのは当然のことであろう。そしてその際、中心になるのはよく知られここでも引用されている「われ思う、ゆえにわれあり」というデカルトの言葉である。周知のことであるが、デカルトは彼のいわゆる方法的懐疑において疑える限りの全てを疑い、疑えるすべては疑わしく従って確実でないとし、これ以上疑うことのできないそれゆえ絶対的に確実なものとしてこの「コギト・エルゴ・スム」に到達したのであった。その過程は日本語で普通『方法序説』と訳されているデカルトの著作に示されていることも周知のことであるが、その要点となる部分は彼の『哲学の原理』と日本語訳される書物にも書かれている。（以下、同書からの引用は、中央公論社から刊行されている野田又夫責任編集『世界の名著22デカルト』所載の、井上庄七・水野和久訳「哲学の原理」による）

われわれが多くの先入見によって真理の認識から遠ざけられ、それゆえ真理を求めるには「少しでも不確実だと思われるすべてのものを、一生に一度は、疑おうと努めるよりほかにないようと思われる。」（同書、331）そして、感覚的事物については疑うことができるし、そればかりか「数学の証明についても、これまで自明であるとみなされていた原理についても」疑われるが、それは「このような事からについて、誤りをおかす人があるのをときとして見たことがあるし、またわれわれは虚偽と思われたことを、きわめて確実で自明であると認めるような人があるのも見たからである。」（同書、332）こうして

「なんらかのしかたで疑うことのできるものを、すべてこのように退け、偽であるとさえ考えるならば、神も天空も物体もないと想定することは容易であり、また、われわれ自身が手も足も、さらには身体ももたぬと想定することさえ容易である。しかしながら、だからといって、このようなことを考えているわれわれが無であると推定することはできないであろう」ということから、『私は考える、ゆえに私はある』という認識は、あらゆる認識のうち、順序正しく哲学する者が出会うところの、最初の最も確実な認識である。」(同書、333) ここから、精神と物体、つまり考え思惟するものと物的なものの区別が知られ、「ただ思惟のみがわれわれの本性に属する」のであり、「思惟は、いかなる物体よりも先に、かつまた確実に、知られるのである。」(同書、333)

こうして、デカルトのコギト・エルゴ・スムにおける「考え思惟する我」は、すべてに対する最も確実なものとして確立される。つまり、後に「精神と物体の二元論」という批判を呼び起こすことになるが、考える我は私の身体さえもいわば向こうに回してそれについて思惟する主体、考え思惟するという限りにおいてわれわれは自然の中にありながら、考えるという一点においていわば自然から抜け出てそれを自らの向こうに回してそれと対峙する主体としての人間がここに明白に言い表されている。

デカルトは、現在では古典力学と呼ばれる物理学が生み出されて近代の自然科学が創始された17世紀の「科学革命」(バナーフィールド)に直接関係していない。それを担ったのはコペルニクス、ケプラー、ガリレイ、ニュートンらの人々であった。そして、これらの近代自然科学の創始者たちは、彼らの意識としては、特に新しい科学を創り出したわけではなく、また当時中世から引き続いてヨーロッパ社会の根幹であったキリスト教に対立したわけでもなかったことは今日では周知のことである。「アルプスの向こう側、ドイツには、ケプラーという優れた天文学者がいて、素晴らしい成果をあげつつあった。ガリレオは、このケプラーと親しく手紙のやりとりをしていた。ケプラーはガリレオにとって大切な研究仲間であるとともに、良い意味の競争相手でもあった。宇宙の研究は神の栄光をあらわし、神の創造の業の素晴らしさを明らかにするものだという思いを、ガリレオはケプラーほど表立って言明してはいないが、彼の活動の根底にはそのような宗教的動因が強く働いていたと見ることができる。」(渡辺正雄『文化としての近代科学』丸善1991年、158-9)しかし、近代科学の創始者たちのそれぞれの意識とは別に、彼らが築いたのは「科学革命」と今日評されるように人類史上全く新しいものの誕生であった。そして、デカルトはこの自然科学の誕生に直接加わっていなかったとしても、自然科学の根本は、彼が表明したように、考える我がいわば自然から抜け出てあたかも「アルキメデスの点」であるかのごとく自然全体を向こうに回してそれに対峙するところにある。ヴィンターがデカルトの「コギト・エルゴ・スム」を引いて「思考する自我に自然という客体にたいする無限の全権・全能をあたえた」というのはそうしたことを指しているであろう。

ところで、前記の科学史家渡辺正雄は、ダ・ヴィンチが鳥の飛ぶ姿を描くために、スケッチするだけでなく、鳥を解剖し骨の構造、羽のつき方・動き方を研究し、それがまた飛行機械の工夫へと進んだことを述べて、「このような行き方をさらに一步進めれば、自然を単に観察・記述するだけではなくて、人間の側から自然に働きかける『実験』という方法が生まれてくる。(中略)そこに数学的考察も加えられるならば、近代科学への道が準備されることになるといえよう。」(同書、63-4)と言っている。近代科学には、初めから、「人間の側から自然に働きかける」ところの「実験」が、つまり人間の側からする自然変革が含まれているのであり、そもそもの成り立ちから単なる思弁でなく自然に働きかけるという技術が一体化しているといえる。もっとも、そのことがより明瞭に「科学技術」となるのは、十八世紀の化学の「科学革命」を経てさらに広い分野にわたって近代科学が大きく発展する十九世紀になってからである。それがヴィンターのいう「のちには行為する自我にも自然と言う客体に対する無制限の全権・全能を与える」ということであろう。そして、この科学技術は産業革命と結びつき内山節が言うように、生産力が毎年倍増することが可能になり、人々が生産力も富みも無限に増大することを覚える「拡大系の社会」が実現する。こうして、現在の「拡大系の社会」の根底にあるのは、自然を向こうに回してそれと対峙しそれを支配する考える我、すなわち科学技術的知であろう。

このような科学的(あるいは科学技術的)知は、時と所を越えた普遍妥当性を持つゆえに、例え特定の個人によって「発見」されても、そのことはその知にとって本質的なことでなく、特定の個人を離れ

ていわば「一人歩き」する万人に共有される「超個人的な」知という性質をもつ。そして新しく「発見」された科学的知はそれまでに人類によって共有されている科学的知と組み合わせられ体系化され、根本のところでは数学の言葉によって記述されて後世へ伝達される。このようにして体系的に纏められた科学的知は、それがそのようなところにまで到達するのに何千年、何百年かかったにせよ、一旦そのように出来上がるならば（もちろん絶えず進歩して行くので出来上がったものがそれで完結するわけでない）後に続く者が適切な指導のもとにそれぞれの一生の一定の時期までに学び取ることができるものであり、すべての者ではないにしても後続世代の者はそれぞれの生涯のその学びの期間以後の時期においてさらに新しい科学的知を付け加えることが重要なことになる。こうして科学的知はすでに獲得されているものを後続世代が纏めて引き継ぐことができ、その上に立ってさらに新しいものを付け加えることが容易であるゆえに、絶えず新しいものを付加しつつ前へ前へと「進歩」してゆくことを本質とする。

こうした科学ないしは科学技術的知を根底におく産業革命後の社会は、それに親和的な「拡大再生産をとげつつけることを正常な状態とした経済システムである」（内山節）資本制商品経済に覆われて、「『停滞』を敵視する社会としてつくられています。とすれば、この社会が、永遠の循環に価値をみいだせるはずはない」（『子どもたちの時間』、51）ということになる。こういう社会において、科学あるいは科学技術的知を学ぶことが学ぶことの本質になるが、それは学校という特別な場所で教師の指導の下になされることになる。しかも内山節が指摘するように、「商品を生産することによって余剰価値を手にし、資本が拡大再生産をとげていくことを目的にした経済システム」（同書、52）である資本制商品経済のもとでは、「資本の拡大再生産のための一コマとして動いてくれる労働力があればそれでよく、まだその労働に依存しなければならぬ間だけその労働が維持され、その必要がなくなれば、それまでの労働は廃棄される、そんなことがここでは繰り返されています」（同書、53-4）ということになる。こうした中で、絶えず「進歩」する科学ないし科学技術的知をさらに推し進めてゆくことに関わろうといわば未来から背中を押されるように絶えず急がされながら「学ぶ」少数者と、「古い労働が廃棄され、新しい労働がそれに替わり、その労働もまたさらに新しい労働にとって替わられていく」（同書、53）という状態における労働力でしかありえないことを見通せるがゆえに「学ぶ」ことにほとんど意味を見出しえない多数者への分裂を含みながら、現在の「拡大系の社会」は続いているのである。

他方、内山節の言い方ですれば前近代の「循環系の社会」の根底のある知は、絶え間なく「進歩」する近代の科学技術的知とは対照的に、循環的といえる。人間がものをつくる技術は人類の成立と共に古い。前近代のその技術は多様に展開されたが、その根本には日本語で「コツ」と言われるような知（といって単なる知性でなく心身一如的な知）があるであろう。この知は、考える我すなわち主観（もちろんこの主観は個人的でなく超個人的な主観一般である）が自然を向こうに回し客観としてのそれに対峙する主観-客観の分裂において主観がその主宰の下にその範疇において客観を纏める科学的知とは違って、主観-客観の分裂を超えた（あるいはそれ以前の）主客合一ないし主客未分において成り立つ。例えば、ある道具を使うのに、それを使う自分すなわち主観が自ら自身の主宰の下にそれをおこうとしても、客観である道具はしばしば主観の思いのままには動かない。それが練習をつみ、工夫を重ねることによってその道具を使うコツを会得したとき、それは一方において主観の思いをすべて捨てて道具という物そのものに即すると同時に他方では主観が道具を自在に操ることを意味し、そこでは道具とそれを使う我は一体化しているのである。しかもこのコツは単に身体の技でなく、心身一如としての、あるいは心身合一としての知である。こうした知が「循環的」であるというのはどういうことか。

コツと言われるような知は、科学的あるいは科学技術的知が超個人的知であるのに対して、パーソナルな知である。つまり、コツはそれを会得した特定のこの人と一体で、その人を離れてはありえない。われわれの身体はそれぞれ分かれているが、コツはそのそれぞれの人の「身についた」知として、その人の死と共に消えてゆく。そして同じコツを会得しようとすれば、それは一人一人が自ら工夫するしかない。つまり、われわれは誰かの会得したコツを継いでそれをもとにさらに新たに何かを追加してゆくということはできず、誰もが一から出発し直して工夫し同じコツを会得することを繰り返すほかないのである。もちろん、同じコツを会得するといったが、それは機械的に同じことが繰り返されるのではなく、そこには例えばある道具を使うコツを会得してなされる仕事にそれぞれの個性が自ずから出てくると

ということが見られるであろう。しかしいずれにしろ、このコツ的な知は、科学的知が一定のやり方で原理的には誰にでも教えられるのとは違って、教えられるものでない。法隆寺宮大工の棟梁としてよく知られた西岡常一に弟子入りした小川三夫は「俺なんか棟梁から『これはこうやって、ここはこうや』なんてこと、一つも教わっていないもんな。二階の納屋に上がって、『鉋屑はこういうもんや』って鉋を一回かけてその鉋屑をくれただけや。それを窓ガラスに貼っておいて、それと同じ鉋屑がでるまで自分で削って、研究しなければあかんのや」(小川三夫『木のいのち木のころ(地)』草思社1993年、97)と述べている。このようにして、コツ的な知は、何世代にもわたってそれぞれが一から誰かがやることを模範としてそれを真似ながら自分で実際にやってみて同じことが出来るようになるということを繰り返すところに成立している。その意味で、これは進歩しない。まさにコツ的な知は何世代も通じて同じことが繰り返される「循環的」な知であるといえる。このような知とその学びを根底にした前近代社会においては「祖父母たちが暮らしたように父母が暮らし、私たちが同じように暮らし、子どもたちもまたそうであるよう循環」(「循環系の社会」26)が根本にあった。

## 5. 終わりに

このように見てくると、内山節が批判的に言うような「資源のリサイクルなどに限定してうまく資源を循環させながら経済成長をはかろうとする」ところの「循環型社会」ならばともかく、今いろいろのところで行き詰まっている(「循環型社会」が提唱されるのもその行き詰まりが認識されているからであろう)「拡大系の社会」を転換した循環社会は、知のありようを現在のままにしては到底実現不可能ではないだろうか。もちろん、現在の「拡大系の社会」を根底で支える科学的・科学技術的知をあたかも人類の歴史において存在しなかったかのように近代前へ、江戸時代へ帰ることは不可能であろう。コツを中心にした技をもつ職人が今後も少数残ることはあっても、多くの人がそうした腕一本で仕事出来るということはあるまいことである。

過去の循環社会における知は、それが典型的に見られる職人の技という形でそれを体得した人のパーソナルな知として伝承されてゆかねばならないとしても、科学技術的知を捨て職人技へと全面的に還ることは不可能である以上、重要なことはコツ的な知をそのまま全面的に保持することでなく、それが「拡大系の社会」に生きる現代のわれわれに語るに耳を傾けることであろう。

コツ的な知は主客未分における知、つまり主観がそれ自身を空しくした「無我」において対象が主観に対する客観でなくそれ自体として如実に現成するといった知である。それに対して、何回も述べた通り科学技術的知は主観が一切のものを自らの向こうに置いてそれを自らの主宰の下に収集するのである。つまり、科学技術的知は主観-客観分裂から出発すると言える。その点でそれはコツ的な知とは根本的に違うのである。しかし、特に科学的な新たな知見が発見されるような場合、発見する科学者は最初何らかの現象を「不思議」なものとして、「驚き」においてその不思議にいわば捉えられ、そのことの上に新たな対象的知の獲得(科学的発見)がある。この「不思議に驚く」というのは決して事柄を主観としての自己の向こうに置いているのではなく、主観が「我を忘れて」事柄の下にある主客未分においてあることである。そうであるなら、主観-客観分裂から出発する科学技術的知の根本には、主客未分のところがあると言わねばならないであろう。ただそうであるにもかかわらず、多くの場合科学技術的知は、その根本のところをいわば素通りして主観-客観分裂の道を上滑りに滑ってゆくのである。現代の「拡大系の社会」においては、資本制商品経済の経済体制に親和的な科学技術的知はますます上滑りに滑ってゆく。「循環型社会」が至る所で行き詰まりを露呈している現在の「拡大系の社会」を転換して開かれてくるものであるとするならば、具体的に様々なことが検討されねばならないことは当然として、社会を根本のところを支える「知」という観点からすると、科学技術的知についてのこうした洞察がまず必要であり、そのことに随伴して科学技術的知がどう生かされどう位置づけられるか検討されてゆくことが要請されるであろう。コツ的な知は現在のわれわれにそうしたことを語りかけているように思われる。

最後にこのことに関わる「学び」について若干触れておく。化学物質の広範な汚染を先駆的に警告した『沈黙の春』の著者レイチェル・カーソンはまた『センス・オブ・ワンダー』の作者でもある。「センス・オブ・ワンダー (the sense of wonder)」とは、「神秘さや不思議さに目を見はる感性」(上遠

恵子訳、新潮社1996年、23)であり、「不思議さに感嘆する感性」(同書、52)であるが、カーソンは子どもに生まれつきのこの感性を新鮮に保っておくには、子どもと一緒にこの世界における神秘や不思議を再発見し感動することを共にする大人が少なくとも一人必要だという。そして『『知ること』は『感じること』の半分も重要でない』(同書、26)として、彼女の言う「センス・オブ・ワンダー」が呼び覚まされると、子どもは対象をもっとよく知りたいと思うようになり、そのようにして知識は身につくのだと述べている。主観-客観分裂から出発して上滑りに滑ってゆく科学技術的知を出来るだけ早く教えようと「学び急がせる」如き学びの中からは、「拡大系の社会」を転換した「循環社会」は実現されてこないであろう。

(「全国農村振興技術連盟」の夏期研修会〈2002年7月10日〉における講演に加筆訂正したものである。)